

第12章 補充法則と相互法則の証明

12.1 補充法則の証明

この節では、補充法則 (定理 11.7) を証明する。まず、第1補充法則はオイラーの規準から直ちに導かれる。第2補充法則を示すために、恒等式

$$(x^2 + 1)^p = \sum_{j=0}^p {}_p C_j x^{2j} = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j x^{2j} + \sum_{k=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_{p-k} x^{2(p-k)} = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j (x^{2j} + x^{2p-2j})$$

が成り立つことに注目する (ここで、 ${}_p C_{p-j} = {}_p C_j$ を用いた)。これを x^p で割れば

$$(\heartsuit) \quad (x + x^{-1})^p = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j (x^{p-2j} + x^{-(p-2j)}).$$

一方、1の8乗根 $\eta = e^{\frac{2\pi i}{8}}$ について、 $\eta + \eta^{-1} = \sqrt{2}$ 、 $\eta^3 + \eta^{-3} = -\sqrt{2}$ を確かめるのは難しくない。さらに、 $\eta^8 = 1$ より、

$$\eta^n + \eta^{-n} = \begin{cases} \eta + \eta^{-1} = \sqrt{2} & (n \equiv \pm 1 \pmod{8} \text{ のとき}), \\ \eta^3 + \eta^{-3} = -\sqrt{2} & (n \equiv \pm 3 \pmod{8} \text{ のとき}). \end{cases}$$

すなわち、任意の奇数 n に対して、 $\eta^n + \eta^{-n} = (-1)^{\frac{n^2-1}{8}} \sqrt{2}$ が成り立つ。そこで、 η を恒等式 (\heartsuit) の x に代入し、両辺を $\sqrt{2}$ で割れば、

$$2^{\frac{p-1}{2}} = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j (-1)^{\frac{(p-2j)^2-1}{8}} \equiv (-1)^{\frac{p^2-1}{8}} \pmod{p}.$$

これとオイラーの規準から第2補充法則が得られる。

12.2 ガウス和

平方剰余の相互法則 (定理 11.6) には様々なタイプの証明があるが、どれもちょっとずつ難しい。ここではガウス和による証明の概略を述べる。前節の補充法則の証明では複素数 $\eta (= 1 \text{ の } 8 \text{ 乗根})$ が使われたが、ここでは、奇素数 p に対して、1の p 乗根

$$\zeta_p = e^{\frac{2\pi i}{p}} = \cos \frac{2\pi}{p} + i \sin \frac{2\pi}{p}$$

を用いる.

定義 12.1 奇素数 p に対して,

$$\tau_p = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p}\right) \zeta_p^a$$

と定め, これを p に関する**ガウス和**という.

ガウス和 τ_p は, 定義だけ見てもどうもよくわからない複素数だが, 平方すると簡単な整数になっちゃうというのが次の定理である. これって, ちょっとびっくりだよな.

定理 12.2 p を奇素数とすると, $\tau_p^2 = (-1)^{\frac{p-1}{2}} p$ が成り立つ.

この定理の証明がこの節の目標だが, その前にいくつかの補題を準備する.

補題 12.3 奇素数 p に対して, $\left(\frac{a}{p}\right) = -1$ をみたす整数 a が存在する.

証明 $f(a) = a^2$ によって定義された写像 $f: (\mathbf{Z}/p\mathbf{Z})^\times \rightarrow (\mathbf{Z}/p\mathbf{Z})^\times$ は, $f(\bar{1}) = \bar{1} = f(\overline{-1})$ より単射ではないから, 全射でもない. これから補題はすぐに導かれる. \square

補題 12.4 p を奇素数とすると, $\sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = 0$ が成り立つ.

証明 前補題のような整数 a をとれば, とくに a は p と素だから, $t = 1, 2, \dots, p-1$ のとき, at の $\mathbf{Z}/p\mathbf{Z}$ における剰余類は, $\bar{1}, \bar{2}, \dots, \overline{p-1}$ 全体にわたる. したがって,

$$\sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{at}{p}\right) = \left(\frac{a}{p}\right) \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = - \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right).$$

よってこの和は 0 であり, 示したい等式を得る. \square

補題 12.5 奇素数 p と整数 s に対して

$$\sum_{a=0}^{p-1} \zeta_p^{as} = \begin{cases} 0, & p \nmid s \text{ のとき,} \\ p, & p \mid s \text{ のとき} \end{cases}$$

が成り立つ.

証明 $p \mid s$ のときは明らかだから, 以下, $p \nmid s$ を仮定して, 和が 0 になることを示す. 恒等式 $x^p - 1 = (x-1)(x^{p-1} + \dots + x^2 + x + 1)$ に $x = \zeta_p^s$ を代入して

$$(\zeta_p^s - 1) \left(\sum_{a=0}^{p-1} \zeta_p^{as} \right) = \zeta_p^{sp} - 1 = 0.$$

s が p の倍数ではないから $\zeta_p^s - 1 \neq 0$ であり、示したい式を得る。 \square

定理 12.2 の証明 まず,

$$\tau_p^2 = \left(\sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p} \right) \zeta_p^a \right) \left(\sum_{b=1}^{p-1} \left(\frac{b}{p} \right) \zeta_p^b \right) = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\sum_{b=1}^{p-1} \left(\frac{ab}{p} \right) \zeta_p^{a+b} \right)$$

の最右辺内側の和について、 $b = at$ とおけば、 $b = 1, 2, \dots, p-1$ のとき、 t の $\mathbf{Z}/p\mathbf{Z}$ における剰余類は $\bar{1}, \bar{2}, \dots, \overline{p-1}$ 全体にわたるから、

$$\tau_p^2 = \sum_{a=1}^{p-1} \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{a^2 t}{p} \right) \zeta_p^{a+at} = \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p} \right) \sum_{a=1}^{p-1} \zeta_p^{a(t+1)}.$$

ここで、補題 12.5 から

$$\sum_{a=1}^{p-1} \zeta_p^{a(t+1)} = \begin{cases} p-1, & t = p-1 \text{ のとき,} \\ -1, & 1 \leq t < p-1 \text{ のとき} \end{cases}$$

がわかるから、補題 12.4 より

$$\tau_p^2 = \sum_{t=1}^{p-2} \left(\frac{t}{p} \right) (-1) + \left(\frac{p-1}{p} \right) (p-1) = - \sum_{t=1}^{p-2} \left(\frac{t}{p} \right) + \left(\frac{p-1}{p} \right) p = \left(\frac{-1}{p} \right) p.$$

よって、第 1 補充法則 (定理 11.7) より定理を得る。 \square

12.3 もっとガウス和

前節ではひとつの奇素数 p についてのガウス和 τ_p の性質を見てきたが、この節では別の奇素数 q をとって、 τ_p と q がどのように絡むのかを調べる。実際には、次の定理の証明がこの節での目標である。

定理 12.6 p, q を相異なる奇素数とすると、

$$\tau_p^{q-1} \equiv \left(\frac{q}{p} \right) \pmod{q}$$

が成り立つ。

ここで注意すべきことは、 $q-1$ が偶数になるので、定理 12.2 より、 $\tau_p^{q-1} \in \mathbf{Z}$ となることである (だって、そうじゃないと合同式の意味がわかんなくなっちゃうもん)。

さて、定理 12.6 の証明の前に、集合

$$R = \{ f(\zeta_p) \mid f(x) \text{ は整数係数の多項式} \}$$

を考える. たとえば $\tau_p \in R$ である. R は和, 差, 積について閉じている. すなわち, R の任意の2元 α, β に対して $\alpha + \beta, \alpha - \beta, \alpha\beta$ は R に属する. また, 明らかに $\mathbf{Z} \subset R \cap \mathbf{Q}$ であるが, 次の補題は逆の包含関係が成り立つことを主張している.

補題 12.7 $R \cap \mathbf{Q} = \mathbf{Z}$.

証明は少しばかり厄介なので (補遺を参照), 以下, これを認めて定理 12.6 を証明する.

定理 12.6 の証明 まず, フェルマーの定理と二項定理を繰り返し用いれば, 任意の整数係数多項式 $f(x)$ に対して

$$f(x)^q = f(x^q) + qg(x)$$

をみたす整数係数多項式 $g(x)$ がとれることがわかる. よって, ある $\alpha \in R$ があって

$$\tau_p^q = \sum_{a=1}^{p-1} \binom{a}{p} \zeta_p^{aq} + q\alpha$$

と書くことができる. さらに,

$$\sum_{a=1}^{p-1} \binom{a}{p} \zeta_p^{aq} = \sum_{a=1}^{p-1} \binom{aq^2}{p} \zeta_p^{aq} = \left(\frac{q}{p}\right) \sum_{a=1}^{p-1} \binom{aq}{p} \zeta_p^{aq} = \left(\frac{q}{p}\right) \tau_p$$

と変形できるから,

$$\tau_p \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) = q\alpha.$$

両辺に τ_p をかければ, 定理 12.2 より

$$\pm p \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) = q\alpha\tau_p$$

を得る. 左辺は整数だから $\alpha\tau_p \in \mathbf{Q}$ であるが, 一方で $\alpha\tau_p \in R$ だから補題 12.7 より $\alpha\tau_p \in \mathbf{Z}$. よって合同式

$$\pm p \left(\tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) \equiv 0 \pmod{q}$$

が成り立つが, p, q が相異なる素数なので示したい合同式が得られる. □

12.4 相互法則の証明

定理 12.6, 定理 12.2, およびオイラーの規準を順に用いて

$$\left(\frac{q}{p}\right) \equiv \tau_p^{q-1} = (\tau_p^2)^{\frac{q-1}{2}} = (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} p^{\frac{q-1}{2}} \equiv (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} \left(\frac{p}{q}\right) \pmod{q}$$

を得るが, 両端の辺は ± 1 だから等しくなければならず, 相互法則の証明が完了する.